

## 新刊紹介

### 「參州一向宗亂記」

原書は江戸時代に書かれたもので、永祿年間三河地方に蜂起した一向一揆を研究する上に、一應参照さるべきものである。勿論この三河一揆研究の根本史料とも言うべきものは松平記・家忠日記増補・三河物語等々に指を屈せねばならぬ。然し嚴密なる史料批判は要するとしても、徳川方の三河一向一揆の記録として最も詳述されていると認められる本書は、前記諸史料の足らざるを多少とも補い得るものとしてその價值を有していると言えよう。而してより一層本書の持つ意義の重大な事は歴史研究者以外の人々にも容易に興味深く通讀出来る事である。江戸時代に編纂された軍記物的要素を濃厚に持つ本書がかくの如き特色を持つのは當然な事で、編纂後かなり多くの入に讀まれたらしく寫本の現存するもの數本にとどまらない。

明治末期一度本書が刊行された事があ  
るが、時と共に識者以外から忘れられて

いた。所が今回三河出身の郷土史家中嶋次太郎氏（松本市在住）が

「本書は徳川史初期及び宗教史の研究として好箇の文獻であり、又三河の郷土史としては徳川家臣の困窮時代の一頁を知り得る」ものとして之が出版を企圖され、百八十頁に亙る冊子として世に送られた事は、戦後笠原氏が開拓せられた三河に於ける一向一揆の研究などと共に、三河の本願寺教團の發展特に一向一揆を中心として松平と本願寺教團の關係等の研究を進展せしむる原動力として誠に喜ばしい限りである。

中嶋氏出版の「參州一向宗亂記」は本文を東大附屬圖書館の寫本を以て書かれ、地名、其の他必要事項は、氏によつて實に親切に頭註されており、又本文中に出て来る人名は別表を作り、その出身地、小傳などを詳細に記し、讀者の便を圖つてある。其の他本文以外に附録として、一家康時代本願寺を繞つての變遷、一本書記載の重なる寺院、一家康關東移封の時の知行割、一當時の食生活の記錄の斷片などが載せられ、又岡崎附近一揆叛亂概略圖も載せられている。かくの如

く氏の並々ならぬ努力によつて、親切に附圖や地名人名の解説の附されている本書は、歴史家ならずとも一讀して興味を起さしめるものであり、手軽に徳川初期の家康及びその家臣團、特に本願寺教團との關係を知る上の教養的書物として一般に一讀されんことをすすめる。本書は其の性質上單なる紹介にとどまるが、本書通讀後氣附いた事を一言すれば誤字脱字の多い事である。この點は中嶋氏も認められる所であるが、正誤表以外の誤記もまだまだ數えられるので今後の訂正をお願いしたい。

本書紹介のついでに中嶋氏も前書に論及されている、本原書の著作年代に就いて少しく私見を述べておく。中嶋氏は東大附屬圖書館の寫本の奥書や、碧海郡誌等の記載より考證して「寛政年間に寛政重修譜が発行せられて居て、此の時代には大いに先祖に對する研究が盛んだつたと見られる時代に本原書は刊行せられたものであり、……云々」としておられる。ところが當大谷大學圖書館に右「參州一向宗亂記」と同一内容の「參州本願寺宗一揆兵亂記」と題する古寫本が二本

ある。(辻善之助博士は兩者を別個の書物として取扱つておられる。日本佛教史中世篇之五或いは同名の別本があるのかも知れないが未だ見ず。)とに角東大本の「三州一向宗亂記」と谷大本の「三州本願寺宗一揆兵亂記」とは全く内容的に同一の原本から出ている事は間違ひなく、表題の表現が異つてゐるのみである。凡らく原本より書寫の場合何人かが都合によつて改題したもので、私の考えでは後者の「三州本願寺宗一揆兵亂記」の方が原書名であると思う。さて當大學收藏の古寫本の内一本に奥書がないが、一本には「安永四年末春寫之、三州額田郡保久村深津氏(花押)」の奥書がある。何等かの理由で故意に書寫年代をふるく書いたのなら別だが、本文と同筆の奥書に「安永四年」と明示する以上、本原書の編纂年代は少くともそれまでさかのぼり得ると考へて大過なからう。しかし猶よく本文を些細に東大本と比較對照して行くに谷大本の方が文章の接續が悪く、逆に東大本は隨所に文章を修正加附してゐる事に氣附く。文章の流暢な東大本即ち「三州一向宗亂記」は何者かによつて加筆さ

れたものと考へられる。故に現在私は今後新しい資料が見出されぬ限り「三州本願寺宗一揆兵亂記」が原書形態を保つものであり、しかもその編纂年代は寛政年間より二・三十年舊くさかのぼり得ると考へてゐる。更にその線にそつて編纂者の名前も考へてみたいと思う。(山田)

(中嶋尙誠堂發行 定價一八〇圓)

### 教行信證と佛教思想

大江 淳誠著

眞宗の所依の經典たる淨土三部經、七祖の釋義は何れも佛教の教理と關聯するところが多い。随つて此等の經論釋を類聚せる教行信證文類もかかる佛教々理の理解なくしては味讀出來ない。かかる立場から教行信證を解明せんとしたのが本書のねらいである。

第一章 阿彌陀佛と衆生

第二章 行業論

第三章 正因論

第四章 涅槃論

第五章 現益論

尙附錄三篇、一 眞宗の體と教義の基本概念、二 往生論註の教理、三 行信釋義と蓮如上人が載せられてあるが何れも主題の意味と關聯を持つものとして特に附加されたものである。

(二七年六月刊・A 5 二三九頁・三〇〇圓・百華苑)

### 眞宗教學史研究

大原 性實著

眞宗教學史の諸問題中、特に願生思想の問題を取扱い、それを中軸とする「信願交際」の論議の展開を解明しようとするものである。目次——眞宗教學史の諸問題、淨土教の中心思想としての願生思想、願生思想の教義的展開、願生歸命說並びに三業歸命說の傳統、「願生歸命辨」を繞る歸命の信相に關する論争、三業惑亂を背景とする信願交際の論議とその批判、三業惑亂關係學匠の宗學。

(二七年六月刊・A 5 三〇〇頁・三八〇圓・永田文昌堂)

### 眞宗教本——禮拜篇——

安井 廣度著

眞宗全般に互り平明簡易な敘述を以てする教科書體のものとして著者が企畫された『眞宗教本』の第一部に相當するもので、第二部に當る「行事篇」は既に昨年十月刊行済である。道場・本章・御影・聖教・莊嚴・勤行の六項目を立てて佛前の禮拜に關することがらに就いての歴史的に正當な意味を適切に教示してゐる。(二七年五月刊・B 6 一一六頁・一〇〇圓・大谷出版社)